

国際結婚者の適応と精神的健康

-異文化出身の妻の場合-

鈴木一代

(埼玉学園大学人間学部)

<要 旨>

本研究では、日本人男性と結婚した異文化出身の妻の適応や精神的健康について明らかにするとともに、異文化出身の妻がかかえる問題を把握するために、東京およびその近郊在住で日本人男性と結婚している異文化出身の妻 20 人（アジア出身者 10 人、欧米出身者 10 人）を対象に半構造化面接を実施した。その結果、日本人男性との結婚については、異文化出身の妻の半分は肯定的であり、全体的な生活についても過半数が満足していた。他方、異文化出身の妻の 6 割はなんらかの心配事、不安、悩みをかかえており、日本人の夫にかかわる事柄が目立った。また、異文化出身の妻がかかえる問題（困難）としては、結婚初期の日本語や生活習慣に関する困難のほか、日本社会、夫婦や家庭、および子どもの養育・教育に関する問題があげられた。日本社会の問題は、「男性優位・女性蔑視」「アジア蔑視」「仕事中心」「画一性」などであり、夫婦や家庭の問題は、「夫が家事を分担しないこと」と「夫が妻や家族とともに楽しく生活しようと努力しないこと」だった。子どもの養育・教育については、「母親が外国人であることや子どもが日系国際児であることに関連して生じる問題」が最も多く、母親のストレスの原因になっていた。最後に、地域社会を中心とする異文化出身の母親をも視野にいたれた子育て支援システム、今後高齢化する異文化出身の妻たちへの支援システム、発達障害や問題行動のある日系国際児への支援システムなどの整備とともに、仕事中心社会である日本社会が構造的に変化する必要性が指摘された。

<キーワード>

適応、精神的健康、国際結婚、異文化出身の妻、家族、支援

【はじめに】

近年、地球的規模で、国際結婚（異文化間結婚）が増加している。日本国内においても、婚姻総数に占める国際結婚者の割合は、1980 年代初頭に 1% を越えて以来、ほぼ毎年増え続け、1989 年には、初めて 3% 台になった。2000 年以降、夫婦の一方が外国籍である婚姻件数は全婚姻件数の 4.5% から 5% 台を推移している（2005 年には、5.8%、約 17 組に 1 組）。国際結婚は一般化の時代を迎えつつあると言える¹⁾。また、1975 年ごろからは、国際結婚のなかでも、夫が日本人で妻が外国人の組み合わせが増加しており、2005 年には、約 8 割を占めている。外国人の妻の国籍に関しては、中国（35.2%）、フィリピン（30.9%）、韓国・朝鮮（18.3%）、タイ（4.9%）、ブラジル（0.9%）、米国（0.5%）、ペルー（0.4%）、英国（0.2%）の順で多い（2005 年）。さらに、婚姻総数に占める国際結婚の比率を都道府県別に見ると（2005 年）、東京都が 9.1% で最も高く、山梨県（8.4%）、千葉県（7.9%）、長野県（7.8%）、愛知県（7.4%）、埼玉県（7.2%）、神奈川県、岐阜県、静岡県（各

7.0%）と続く²⁾。国際結婚は首都圏に集中している。

日本における国際結婚の増加が比較的最近の社会現象であるため、日本人のかかわる国際結婚に関する心理学および隣接分野の研究の蓄積はそれほど多くない（例：竹下、2000）。ほとんどの研究は、日本人女性と外国人男性の国際結婚についてであり、日本人男性と外国人女性の国際結婚を対象とした研究は少ない（例：Harcah-Pinke, 1988）。前者の場合には、日本人女性と米国人男性の組み合わせが多く（例：矢吹、1997）、日本人女性と米国人以外の外国人男性との国際結婚を視野に入れたものは少ない（例：鈴木 2003）。また、後者の場合には、日本人男性とアジア人女性の組み合わせ、特に、「農村の外国人花嫁」の生活意識や異文化適応についての研究が目立つ（例：桑山、1995；中澤 1996）。

国際結婚者は、一般に、どちらかのパートナーの出身地に居住する場合が多い。その際、異文化出身のパートナーはさまざまな問題に遭

遇すると考えられる（国際結婚を考える会、2007、鈴木、2000など）。たとえば、言葉、アイデンティティ、宗教、習慣、滞在許可や労働許可、子どもの養育・教育についての問題である。これらの問題は国際結婚者の適応や精神的健康に直接的・間接的にかかわってくるが、都市部で生活する国際結婚者、特に、異文化出身の妻が、日本社会のなかで、あるいは、家庭のなかでかかえる問題については、今まであまり問題にされてこなかった。

本研究では、日本人男性と結婚し、夫の出身国である日本（都市部）に居住する異文化出身の妻の適応や精神的健康について明らかにするとともに、異文化出身の妻がかかえる問題について把握する。さらに、その支援について考える。

【方法】

1) 調査参加者

東京近郊在住で日本人男性と結婚した外国人女性 20 人。内訳は、アジア出身者 10 人（フィリピン 2 人、中国 2 人、インドネシア、韓国、香港、台湾、インド、以上各 1 人）と欧米出身者 10 人（ドイツ 3 人、イタリア 2 人、米国、オーストラリア、ブルガリア、フィンランド、ポーランド、以上各 1 人）である。原則として子どもがいることを条件としたが、欧米出身者のうち 2 人には子どもがいない。また、アジア出身者には、離婚した人が 1 人、子どもを連れて再婚した人が 1 人含まれている³⁾。調査参加者は知人からの紹介、調査参加者からの紹介、および日本語教室等からの紹介によるが、大半は知人を媒介としている⁴⁾。

2) 調査時期・場所

2007 年 2 月から 5 月。1 人につき約 1 時間 30 分から約 5 時間 30 分。東京都、神奈川県、埼玉県の調査参加者の自宅、カフェ、レストランなど。

3) 調査方法

個人面接法（半構造化面接）。

①面接内容

鈴木（2000 など）を基に、先行研究も参考にし、質問内容（ガイドライン）を作成した⁵⁾。

主な内容は、a) 調査参加者およびその家族（夫、子ども）の属性（国籍、年齢、職業、来日時期、滞在期間、滞在許可、教育歴、言語力、家族構成、家族内の言語使用など）、b) 結婚に至る経緯、c) 夫婦関係や相違点、d) 子どもの養育・教育、e) 日本および母国への気持ちに関連した事柄、f) 交友関係、g) 全般的な満足度、h) 困難な事柄（過去と現在）、i) 心配な事柄などに関する質問である。a) と b) は調査

参加者の特徴とその背景を把握するための項目であり、詳細な記録用紙を作成した。c) から i) は調査参加者の適応、精神的健康、困難などを明らかにするための項目である。記録用紙およびガイドラインは基本的に英語で用意した。

なお、WHO（世界保健機構）の定義によると、健康は、単に病気や病弱でないだけではなく、身体的・精神的・社会的にも完全に快適な状態を指す。本研究においても、精神的健康を広義にとらえ、調査参加者が語りのなかで、日本人男性との結婚や家庭生活をどのように位置づけているかに注目する。

②使用言語

原則として、調査参加者の希望に従った。日本語（10 人）、主に日本語で一部が他言語（6 人）、日本語と英語の混合（3 人）、英語（1 人）だった⁶⁾。

③調査手続き

まず、調査参加者（候補者）に対して、メールや電話で、面接への参加の意志を確認し、場所と時間を決定した（調査参加者の希望に従った）。面接の際には、簡単な自己紹介をおこない、調査の目的や結果の用途、匿名性の保持、面接時間（2 時間程度）等について説明した。その際、話したくない事柄については無理に話す必要のないことも伝えた。同時に、録音機（IC レコーダ）の使用についての許可を求めた。録音機の使用・未使用にかかわらず、あらかじめ用意した主な質問項目（ガイドライン）を印刷した用紙の余白にできる限り筆記するように努めた。また、調査参加者および家族の属性について尋ねる部分については、時間を短縮するためと使用可能言語や言語能力を把握するために、なるべく調査参加者自身に記入してもらうようにした。なお、面接時間の不足のために、面接内容の一部をメールで返送してもらった調査参加者が 1 人いた。

4) 調査結果の処理・分析

面接記録をコンピュータに入力し、各調査参加者について基礎データを作成した。録音記録がある場合には、原則として逐語記録を作成したが、言語等の問題で回答が冗長だったり、重複・反復が多い部分については、本質に影響を与えない範囲で内容をまとめた。外国語から日本語への翻訳は調査者（筆者）および研究補助者がおこなった。

上記の基礎データを基に、質的な分析をおこなった。まず、事例ごとに、結婚に至る経緯、夫婦間の相違点や問題、子どもの養育・教育、日本および母国への気持ち、交友関係、満足度、困難・心配事などの領域別に特徴的な事柄をま

とめた。次に、外国人の妻が、日本人男性との結婚や結婚生活をどのように評価しているか、どのような心配事・不安・悩みや問題をかかえているか（かかえていたか）、親密な交友関係（ネットワーク）を形成しているかどうかなどに注目し、主に KJ 法に準じた方法によって整理した。その際、各事例の特徴（出身国、滞在年数や結婚年数、年齢、教育レベル、職業の有無、日本語の能力など）についても考慮した。

なお、研究倫理や匿名性の保持については細心の注意を払った。そのために、各事例には、本質に影響を与えない範囲で一部修正を加えている。

【結果と考察】

まず、調査参加者の属性、次に、異文化出身の妻の適応や精神的健康、および問題（困難）について言及する。さらに、特徴的な事例をあげ考察する。

1. 調査参加者の属性

調査参加者の属性（一部）を示したものが資料の表 1 である。年齢は 30 代が 5 人、40 代が 11 人、50 代が 4 人である。ほとんどがパートタイムで仕事をしている（フルタイムは少数）。特に、母語や母文化を生かした職業（語学講師など）が目立つ。教育レベルは、高卒から大学院修了までだが、欧米出身者の場合は、大学卒業以上がほとんどで、日本語を専攻した人が多い。日本滞在年数は、10 年未満が 4 人、10 年から 15 年未満が 7 人、15 年以上 20 年未満が 3 人、20 年以上が 6 人であり、10 年以上の長期滞在者が多い。夫と知り合った場所は、日本が 12 人（留学や仕事のための滞在中）、海外が 8 人（留学・旅行先 4 人、あるいは出身国 4 人）である。結婚期間は、5 年未満が 3 人、5 年以上 10 年未満が 5 人、10 年以上 15 年未満が 1 人、15 年以上 20 年未満が 6 人、20 年以上が 5 人で、過半数が 10 年以上である⁷⁾。日本滞在年数と結婚年数が必ずしも一致しないのは、結婚前に仕事や勉学のために日本に滞在していたり、結婚後、夫の仕事等のために海外に滞在していることによる。国籍については、日本国籍取得者はアジア出身の 1 人だけで、残りは配偶者ビザか永住ビザによる滞在である。日本での永住に関しては、永住予定の人が大半だが、なかには、今後（老後）、出身国への帰国を考慮している人もいる。宗教については、約半数がキリスト教で、「なし」と答えた人が 3 割である。日本語の能力を 5 段階で評価すると、「5」が 9 人、「4」が 6 人、「3」が 3 人、「2」が 2 人で、大部分が面接を日本語で実施するのに支障のないレベルである。

配偶者（日本人男性）の年齢は 30 代から 60 代（大半が 40-50 代）だが、全体的に妻が年下で、さらに年齢差の大きい組み合わせが目立つ

（15 歳以上の年齢差が 3 割：アジア出身 4 人、欧米出身 2 人）。夫の職業は、会社員、公務員、教員、専門職、職人、自由業、主夫など多岐にわたる。教育レベルは、高卒から大学院までだが、専門学校・短大・大卒以上がほとんどである。また、夫婦の教育レベルが同じ場合が 11 組、夫の方が高い場合が 4 組（アジア出身 1 組、欧米出身 3 組）、妻の方が高い場合が 5 組（アジア出身 3 組、欧米出身 2 組）である。宗教については、特にない場合が大半である。言語に関しては、欧米出身の妻をもつ夫のほとんどは英語（程度はさまざま）を話すか、英語以外の妻の母語も話す人は 2 人だけである。アジア出身の妻をもつ夫の場合には、妻の母語を話せる人が 4 人、英語を話せる人が 4 人いるが、日本語しか話せない人も 3 人いる。

子どもの年齢は 1 歳から成人までさまざまである。特徴的なのは、日本生まれ、日本国籍（妻の出身国の法律との関連もある）、日本の公立の幼稚園・学校に在籍し、日本語を第一言語として成長している子どもが多いことである。また、家庭の主言語が日本語（あるいは、日本語のみ）である家庭がほとんどである。

2. 異文化出身の妻の適応と精神的健康

異文化出身の妻の適応や精神的健康を明らかにするために、異文化出身の妻の日本人男性との結婚に対する評価、全般的な生活および結婚生活への評価（満足度）、心配事・不安・悩み（有無と内容）、友人関係について取り上げる。

（1）日本人男性との結婚についての評価

日本人男性との結婚についての異文化出身の妻の評価を肯定的な場合と否定的な場合に分類し検討する。

1) 肯定的な場合

日本人男性との結婚を肯定的に評価しているのは 10 人（事例①⑦⑧⑩⑪⑭⑮⑰⑱⑳）だった。まず、日本人男性と結婚したというよりも、夫を個人として評価している場合である（事例①⑦⑮⑱）。たとえば、「主人は日本人というよりは、クリスチャンだと思っている。だから、私の結婚がよかったと思う理由はクリスチャンと結婚できたからで、日本人ということとは関係ない。」（事例①）である。また、夫の人柄（人間としてのやさしさ、思いやり）などのために日本人男性との結婚を肯定的に評価している場合もある（事例⑧⑩⑭）。具体的には、「よかったと思う。やさしい人なので。そ

れに、インドネシアのことも知っていて、気持ちをおわかってくれる。」(事例⑧)や「人間としてやさしい。社会や人間に関して、深い人間と思った。ブルガリア人の性格を知っているし。。。」(事例⑭)などである。また、他の人とは結婚したことがないので比較ができないと述べながらも日本人の夫(人柄)を肯定的に評価している人もいた(事例⑪⑬⑲)。

日本人男性との結婚を肯定的に評価している異文化出身の妻は夫をひとりの人間として評価していることがわかる。また、夫が妻の母国(文化など)について理解しているという妻の認識は妻の気持ちに肯定的に作用している。

2) 否定的な場合

日本人男性との結婚を否定的に評価している人は8人(事例②③⑤⑥⑨⑫⑮⑱)である。

その理由のひとつとして、男女平等、家庭生活(家事の分担)などについての価値観の違いがあげられた(事例⑤⑥⑨)。たとえば、次のような事例である。

<事例⑤>

「日本人との結婚は想像していたより難しかった。(中略)香港の男性と女性は同等(equal)。まったく違う世界。(中略)香港の女性はとても平等なのでとても難しかった。(中略)一番難しいのは価値観です。夫は平等のように見えるけれど、本当はそうではない。女性は主婦でなければならないという伝統的な考えです。でも私はそうではない。(中略)[夫は]本当は、女性が夫に従うという感じなの。」([]は筆者による)

事例⑤は、香港出身で、「男女は平等」という価値観の下に育っている。留学先のイギリスで、留学生だった夫と知り合った当時は、お互いに平等だった。その後、結婚し、日本に来たら、夫が変化してしまったという。夫は「男女は平等」ということを表面的には理解しているように見えるが、本質的には伝統的な価値観(男性優位。女性は男性に従う)をもっているため事例①の考え方とは相容れない。

そのほか、日本人の夫には、妻に対する理解、愛情や思いやりがないと感じているため否定的に評価している人もいる(事例②③⑬)。たとえば、事例⑬は「日本人と結婚しなければよかったと思うのはやさしさがないこと。イタリア人の男だったら、もう少しやさしいかなって思う。」と述べている。母国の男性と比較し日本人男性(夫)が妻に対してやさしくないことを嘆いている。また、日本社会が仕事中心であるために、日本人の男性との結婚を幸せに感じられない場合(事例⑫)や夫の両親から独立した自分たちだけの生活を築くことが難しい場合(事例⑮)もあった。

なお、肯定的も否定的でもない人が2人いた

(事例④⑱)。

(2) 全般的な生活への満足度

異文化出身の妻たちは、現在の全般的な生活(結婚生活を含む)をどのように評価しているのだろうか。外国人の妻たちの語りは、全体的に満足している場合、全体的に不満な場合、どちらでもない場合に整理することができる。

まず、自分自身が置かれている状況について多少の不満があっても全体的に満足しているのは事例①②⑤⑦⑧⑩⑪⑬⑭⑮⑯⑳の12人(60%)である。経済、仕事、家族関係に問題がなく、異文化出身の妻が比較的思ったように生活できる状況が存在していることがその理由のようだ。

それに対して、現在の全般的な状況に満足していないのは、事例⑫⑰⑱の3人である。事例⑫はサポートもなくひとりで子ども(幼児)を育てていること、事例⑰は仕事で過労死寸前の生活をしていること(日本社会の仕事の仕方への不満)、事例⑱は夫婦関係を理由としてあげている。これらの妻たちは3人とも欧米出身である。

また、どちらでもない人が5人いた(事例③④⑥⑨⑲)。

(3) 心配事、不安、悩み

大きな心配事、不安、悩みがないのは事例①⑥⑦⑧⑩⑬⑮⑳の8人(40%)である。そのうち、アジア出身の妻が5人で、アジア人妻の半数に当たる。

それに対し、12人(60%)がなんらかの心配事、不安、悩みをあげているが、そのうち、7人が欧米出身の妻である。事例②(仕事や住居)、事例④(夫が主夫なので一家の稼ぎ手としていつまで家族を支えられるか)、事例③(夫の元の彼女の出現、夫が年を取っているので、子どもの教育ができるかどうか)、事例⑤(夫とのコミュニケーションの難しさ)、事例⑨(将来のこと)、事例⑪(子どもへの対応、人の話の上手な聞き方、時間の不足、義務的なシステムとしてのPTAへの不安)、事例⑫(幼稚園で日本語で100%表現できないことやお母さんたちに無視されること)、事例⑭(お金と夫の健康)、事例⑯(夫の死後のこと、老後のお金と子どものこと)、事例⑰(自身の健康)、事例⑱(夫が亡くなった後の住居や経済的な事柄)、事例⑲(夫が過労で倒れること)である。日本人の夫にかかわる心配事が多い。夫の健康や亡くなった後の心配や不安(経済的な事柄)も目立った(事例⑭⑯⑱)。母国を離れた異文化出身の妻にとって、夫は、物理的にも精神的にも唯一の支えだからであろう。なお、アジア出身

の妻よりも欧米出身の妻に心配事等が多い理由については、今後さらに検討する必要があるだろう。

(4) 友人関係

悩みや心配事、さまざまな問題が生じたときに、友人の存在は重要である。特に、悩み等を友人に話したり、相談することによって問題を解決したり、精神的な健康を保つことが可能になるからである。

本調査のほとんどの異文化出身の妻は悩みを話せる友人をもっていた。そのような友人とは、主に、仕事、子ども、過去や現在の所属組織（大学・高校、教会、日本語教室、「外国人の妻の会」）を通じて知り合っている。また、ほとんどが同国人あるいは日本人の友人をもち、過半数には、同国人と日本人の両方の友人がいる。

ところで、最近では通信技術等の発達により、母国にいる友人たちと電話やEメールを用いて簡単にコミュニケーションができるようになったために友人の中には母国にいる友人も含まれている。電話やEメールによるコミュニケーションは異文化出身の妻たちの精神的な健康の維持に貢献している。

3. 困難や問題

異文化の妻たちが感じている、結婚生活のなかで大変なこと（大変だったこと）や日本での生活なかで難しいこと（難しかったこと）などについて取り上げる。

まず、滞在期間が短い妻や正式に日本語・日本文化を学習したことがない妻の場合には、日本語に関する事柄（言葉が理解できない、表現が理解できない、学校のお知らせを理解できない、など）（事例②⑧⑩）や生活や生活習慣に関する事柄（料理、畳の生活など：事例①④）が問題としてあげられたが、それ以外の問題（困難）を整理すると次のようになる。

(1) 日本社会の問題

1) 妻や母親としての役割が強調され、個人として認知してもらえない

夫か子どもとの関係のなかでしか自分を認めてもらえないためにアイデンティティを失いそうになる問題である。たとえば、「自分の名前を使う機会が少なく（特に仕事をしていない場合）、〇〇の奥さん（近所付き合い）、〇〇のママ（学校や母親間）と呼ばれ自分がない」（事例①⑤）である。また、妻や母としていろいろな役割を期待され、集団プレッシャーを感じている場合もある（事例⑬など）。

2) 出身国・性別による差別がある

「アジア出身の外国人女性についてお金のた

めに日本にいるという誤解がある。アメリカとかヨーロッパ出身で白人だとだれでも神様みたいな扱いを受ける。」（事例⑨）、「中国の大学を卒業していることや仕事上の能力を認めてくれない。」（事例④）、「日本の男性の頭の中には、女性だから下、外国人だから下、日本にいるフィリピン人（女性）は水商売が多いから低いというステレオタイプがある。」（事例①）などである。

3) フライベートな生活が尊重されていない（仕事中心社会）

「仕事についての考え方は西洋と日本の最も大きな違い。日本では仕事が大切で家庭を無視している。仕事のプレッシャーが大きいので子どもが病気になっても夫には関係ないことで女性が全部やらなくてはならない。」（事例⑮）、「オンとオフの切り替えがないく休むという概念があまりない。」（事例⑲）などである。

4) その他

「日本の会社では規則も仕事の範囲もはっきりしていない。また、直接いわないで、プレッシャーをかける（例：有給休暇の権利があってもとれない）」（事例⑮）、「日本は画一的で、必要のないことでストレスの多い社会。」（事例⑨⑲）、「日本は人間を大切にしない、人間に対して優しい社会ではない。人間が社会のために生きている。」（事例⑲）、「日本の男性は仕事ばかりしているが、社会的に他の選択肢がない」（事例⑲）、「他人が困っていても関心がない（例：乳母車で電車に乗る時に手伝ってくれない）」（事例⑮⑱）などである。

異文化出身の妻があげた日本の社会に関する主な問題は、「妻や母親としての役割が強調され、個人としては認知されない」「出身国・性別による差別がある」「プライベートな生活が尊重されていない」だった。日本人男性と結婚した異文化出身の妻には、日本社会の男性優位・女性蔑視、アジア蔑視、仕事中心、画一性などが強く認識されており、ストレスの大きな原因となっている。また、特徴的なのは、女性蔑視やアジア蔑視については主にアジア出身の妻、仕事中心社会については主に欧米出身の妻によって指摘されていることである。

(2) 夫婦や家庭の問題

1) 夫が家事を分担しない

「夫が家事に協力しない。」（事例⑳）、「家事は夫婦二人でやるべきもので、女性は家事をするために生れてきたわけではない。」（事例⑤⑲）、「パートナーに対する意識の違い。中国は家事の分担はする。共働きなので分担しなければやっていけないし、専業主婦はいない。」

(事例⑥)、「ヨーロッパの男は家で手伝うのに夫は家のことをしたくない(私が全部し、夫に従う)。最初はしたがしなくなった。また、家族の頭は父親なので(経済のことではない)何かを相談するのも決めるのも父親で家族のためにいろいろやる。家族を守る。」(事例⑭)、「最初は買い物も料理もしてくれたが、子どもが生まれたらあまりしなくなった。家事を手伝って欲しい。」(事例⑬)、などである。

2) 妻や家族とともに楽しく生活しようと努力しない

「夫は仕事で疲れているので、家でごろごろしている。」(事例⑭)、「夫が自分の召使のように扱う。機嫌が悪い時に、ボスの口をきく。」

(事例⑬)、「子どもが生まれると夫婦ということが日本人の頭のなかから消えてしまう(例:夫が妻や家族を置いて友人と飲みに行く)のはさびしい。」(事例⑬)「愛情を言葉で表現してくれないので、自分のことはもうどうでもよいのかと思うことがある。日本人の男は年取るとそうなる。歩くときも別々に歩く。」(事例⑯)など。

夫婦や家族の問題として主にあげられたのは、「夫が家事を分担しない」と「妻や家族とともに楽しく生活しようと努力しない」だった(後者は特に欧米出身の妻による)。興味深いのは、結婚当初は家事を分担したり妻や家族のために努力していても、子どもが生まれたり(事例⑬⑯)、長く結婚生活を続けている(事例⑭)と、時間とともに、日本社会のなかで日本人男性がだんだんとそれらをしない方向に変化していくことである。それは異文化出身の妻たちの大きな悩みになっている。

(3) 子どもの養育・教育に関する問題

1) 日本の学校(幼稚園)や教育内容の問題

「画一的で、創造的な考え方をサポートしていない(みんな同じ)」(事例①)、「プリスクール(幼稚園)の教育の内容(スポーツと行事が多い)」(事例⑫)、「1クラスの人数の多さ」(事例⑰)、「日本の教育には生きる上での指針がない」(事例⑤)。

2) 子どもの日本語(国語)の習得および母親の日本語能力等の限界

「子どもが国語(日本語、漢字)を学習できるか」(事例③④)、「子どもの質問に日本人の立場で答えるのが難しい(特に、歴史)」(事例④)、「言葉が不十分なのでPTAの話の内容や学校からのお知らせの理解が難しかった」(事例⑧)。

3) 母親が外国人であることや子どもが日系国際児であることに関連して生じる問題

「同級生から“ハーフなの”と聞かれたときの子どもへの対応(小学校1年)」(事例④⑨)、「公園で子どもが私(母親)に英語で話しかけるとたたく子がいた」(事例⑪)、「日本人のお母さんたちのなかに外国人の母親を見てびっくりし戸惑う人がいること」(事例⑮)、「子どもと二人で歩くと子どもが外国人と言われる」(事例⑮)、「子どもの問題(例:他の子からからかわれる)への日本的な対処の仕方がわからない(事例⑯)」、「母親も子どもも日本人同士で固まっていて仲間に入れてくれない(例:子どもが小さい時、近所の公園での遊びの中に入れてくれなかった)。同じスポーツクラブなかの子どものお誕生日に呼ばれない。」(事例⑭)、「日本人の母親たちが自分の子どもをバイリンガルにしようとして近寄ってくる(幼稚園)」(事例⑫)、「二つの文化の間でどのような教育を受けさせるかの問題(両文化の継承の問題)」(事例⑤)など。

4) 子どもの養育・教育についての夫との意見の相違:特にしつけの厳しさの程度(子どもにどのような場合にどの程度自由を認めるか)(事例④⑤⑪⑮⑱)

5) 子どもの発達や(問題)行動

「不登校・退学」(事例②⑯)、「幼児期の消極性」(事例⑮)、「他の子どもを嘔むこと」(事例⑫)、「思春期の子どもの理解(事例⑰)」である。

子どもの年齢はさまざまだが(事例③④⑪⑫⑱)は乳幼児、事例①④⑤⑥⑪⑬⑮⑰⑱は学齢期、事例②⑧⑨⑯は高校生、事例②⑦⑭⑰⑱は大学生以上)、子どもの養育・教育に関する問題として、「日本の学校(幼稚園)や教育内容の問題」「子どもの日本語(国語)の習得および母親の日本語能力等の限界」「母親が外国人であることや子どもが日系国際児であることに関連して生じる問題」「子どもの養育・教育についての夫との意見の相違」「子どもの発達や(問題)行動」があげられた。最も多かったのは、「母親が外国人であることや日系国際児であることに関連して生じる問題」だった。外国人の母親とその子どもが周囲の日本人から容易に受け入れられていない状況があることがわかる。特に幼児期や学齢期に問題が多くみられた。このような問題は子どもや母親のストレスの大きな原因になっている。「子どもの養育・教育についての夫との意見の相違」は国際結婚家庭特有の問題ではないが、日本人の夫と出身文化の異なる外国人の妻との間ではより違いが生じやすいと考えられる。しかしながら、夫のなかには妻にすべて任せている人もいる(事例②)

③)。「日本の学校(幼稚園)や教育内容の問題」は、アジア系の母親と欧米系の母親の両方からあげられている。学校(幼稚園)や教育内容は、欧米で教育を受けた外国人の母親からはよく指摘される問題である(鈴木 1998、高橋 2003)。「子どもの日本語(国語)の習得および母親の日本語能力等の限界」はアジア出身の母親があげている。事例⑧は、そのような状況を他の母親からの支援や夫の協力によって解決しているが、そのような支援が得られない場合には問題の解決は難しくなる。「子どもの発達や(問題)行動」は、子どもが国際児であることに起因する場合もあるが、国際児に特別な問題とは限らない。異文化出身の母親は、子どもの発達に伴う問題と国際児であることによる問題の両方に対処していかなければならず、より困難な状況に置かれることになる。日本には、国際児のこのような問題に対応できる専門家がほとんどいない。

4. 事例の検討と支援について

日本人男性との結婚に対する評価(気持ち)と日本の生活に対する全体的な評価(満足度)の両方に否定的だった事例⑫、および日本人男性との結婚には否定的だが全体的な生活についてはどちらとも言えなかった事例③と事例⑨を取り上げ、支援について考える。

<事例③>

[30代、フィリピン出身、主婦、結婚約3年、言語(タガログ語、日本語可、英語可)、高卒、元キリスト教(現在なし)、家族の言語は日本語、乳児1人、永住予定]

タレントとして仕事をしていたクラブで、客として来た20歳近く年の離れた夫(職人、高卒)と知り合い、その1ヶ月後に望まれて結婚する。当時、夫は「やさしかった」という。結婚についてはどちらの家族からも特に反対はなかった。結婚後は東京郊外に住んだが家族や友達に囲まれたフィリピンでのにぎやかな生活に比べて「寂しかった。静かで友だちがいなかった。」と語っている。子どもが生まれたときは嬉しかった。しかし、夫は仕事で忙しく、たまに家にいる時でもごろごろテレビをみているだけで、何か一緒にすることはあまりない(話もしない)。物価が高く、夫の収入が不安定なので家計のやりくりが大変だという。フィリピンならばみんな一緒に暮らしているので手伝ってもらえるが子育ても家事もすべて1人でやらなければならないので負担を感じている。また、夫がかなり年上なので将来の子どもの教育についても不安があり、夫の前の彼女(日本人)が現れるのではないかと心配もかかえている。近所にいる夫の親族とは交流はあるようだが、主な友人は昔の仕事仲間のフィリピン人である。しかし、遠方にいるので電話で話をする。ときどきは夫のことなど悩みも話す。フィリピンのことはよく思い出すとす。結婚後1度しかフィリピンに戻っていない。1ヶ月に5回ぐらいフィリピンに電話を

かけておりホームシックになっている。

いわゆる「出稼ぎ」のために来日し、日本人男性(客)と結婚した事例である。結婚3年で日本語も十分とは言えない。幼い子どもの育児や家事をひとりでこなさなければならないことに大きな負担を感じている。大勢と一緒に生活し、お互いに助け合う母国での状況と大きく異なる日本の生活にうまく適応できないでいる。夫との関係もよいとは言えない。また、夫との年齢差のために、子どもをかかえ将来に大きな不安がある。

<事例⑨>

[40代、インド出身、語学講師(非常勤)、結婚約20年、言語(ベンガル語、日本語堪能、英語堪能)、大学院修了、ヒンドゥ教、高校生1人、家族の言語は日本語(主)と英語、永住予定]

日本が好きでスカラシップを得て日本の大学に留学する。留学中に会社員(大卒)の夫と知り合う。夫との年齢差が気になったがやさしい人だったし(現在はそうは思っていない)、留学生で寂しい生活をしていたので結婚した。どちらの家族からも大きな反対はなかった。結婚後は都内で夫の母親(現在は他界)と同居したがうまくいかず(精神的にかなり消耗した)、その後、東京近郊に転居し、子どもが生まれる。夫は年上にもかかわらず、家のことは妻に任せっきりで、家族に責任をもたないで不満があるが、夫にはもう期待をしないことにしている。夫が病気になる面倒を見なければならない状態が怖い将来のことを考えないようにしている。最近、日本の魅力がどこにあるのかわからなくなってきているが、インドに戻っても(1年に1回)昔のインドではなく、居心地の悪いこともある。「無国籍みたいになっちゃって。どこに行っても幸せになれない。不幸せな者になってしまった。」と語っている。また、年をとってきたせい、インド(家族、友達、社会)について考えることがよくあるという。友人は欧米人で悩み等も話したりする。

留学のために来日し日本人男性と知り合い結婚し、長期にわたり結婚生活を継続している事例である。日本語は堪能で教育レベルも高い。夫が家族や家庭生活を大切にしないことが大きな問題であり、夫婦関係はよくない。夫がかなり年上のため将来の日本での生活に不安もあっている。日本で居心地のよい場所を見つけ出せないでいる。

<事例⑫>

[30代、オーストラリア出身、主婦/英語の個人教授、結婚後約4年、言語(英語、日本語可)、大卒、幼児1人、キリスト教、家族の言語は英語(主)と日本語]

日本に興味がありワーキングホリデイビザで来日し言語学校で英語を教える。その間、知人の紹介で夫(30代、会社員、大卒)と知り合い結婚。親から大きな反対はなかった。東京近郊に住んだが、近所では、当初じろじろと見られた。子どもが生まれ、夫との関係はよいが、夫が仕事中心なので結婚生活は幸せではない。

また、子育てのサポートがなく、ひとりで小さな子どもを育てていくことが肉体的にも精神的にも負担である。日本語が不十分なために幼稚園で言いたいことを表現できないことや仕事中心の日本社会に不満がある。夫の親族(遠方)との関係は良いし、欧米人の友人もいる。年に1-2回帰国しており、将来はオーストラリアに住む予定である。

日本で語学教師として働いている時に知り合った日本人男性と結婚し、結婚4年の事例である。日本語が十分でないことにストレスがある。夫が仕事中心なので結婚生活に幸福感はないが日本社会のシステムのせいと理解しているので夫婦関係には問題がない。現在、子どもの育児が最大の課題である。特に、日本には母親の子育てを支援するシステムがなく、幼い子どもを自分ひとりで育てていかなければならないことに困難を感じている。

上記の3事例は、結婚年数、日本語能力、出身国などは異なっているが、適応や精神的健康に関連する問題を抱えていることが推察される。次に、上記の事例を中心に、異文化出身の妻に特徴的な問題を整理し、その支援について考えてみたい。

まず、異文化出身の母親がサポート(夫を含む)のないなかで、ひとりで子育てをしなければならないことに大きなストレスを感じることがあげられる(事例③⑩)。アジア圏では周囲の助け合い、欧米諸国ではサポートシステムの存在というように、母親の子育てを日常的に援助する習慣、あるいはシステムがある。最近では、日本でも、子育て支援に関心が集まるようになったが、その際、日本人男性と結婚した異文化出身の妻(母親)も視野にいれた子育て支援システム(地域社会の支援、母親同士の互助など)を整備する必要があるだろう。

次に、年の離れた日本人男性と結婚した異文化出身の妻がかかえる夫の死後の生活への不安・心配があげられる(事例③⑨)。これは、将来的には、異文化出身の妻の高齢化にともなう介護の問題にもつながっていく。今後、日本人男性と結婚する異文化出身女性のさらなる増加が推察されるが、日本社会のなかで高齢化していく異文化出身の妻への物理的・精神的支援について考慮することが望まれる。

また、異文化出身の妻たちのなかには、程度に差はあっても、日本語が不十分なことによるストレス(事例⑩)や日本人男性や日本社会の固有性のために心理的な問題(事例③⑨)をかかえている人たちがいる。地方自治体には、外国人の日本語学習支援のためのボランティアによる日本語教室があるが、日本語だけではなく、日本に定住する可能性の高い、異文化出身

の妻のこころのケアも視野にいれた支援システムも整備していく必要があるように思われる。そのためには、異文化間カウンセリングや異文化間ソーシャルワーク(石川、2000)などの専門家の育成も必要であろう。

なお、日本人男性と結婚した異文化出身の妻がかかえる問題の背景には、日本社会自体の問題がある(仕事中心、伝統的な性役割観、など)。したがって、日本社会の構造的な変化も必要不可欠であろう。

【まとめと今後の課題】

本研究では、日本人男性と結婚した異文化出身の妻の適応や精神的健康について明らかにするとともに、外国人の妻がかかえる問題を把握するために、東京およびその近郊在住で日本人男性と結婚している異文化出身の女性(妻)20人(アジア出身者10人、欧米出身者10人)を対象に半構造化面接を実施した。

その結果、次の事柄が明らかになった。

1) 日本人男性との結婚については、異文化出身の妻の半分は肯定的だったが、4割は否定的に評価していた。肯定的な場合には、夫の人柄、否定的な場合には、男女平等や家事の分担などについての夫婦間の考え方(価値観)の違いや夫の人柄がその理由としてあげられた。

2) 全体的な状況については、異文化出身の妻の過半数が満足しており、1/4はどちらでもなかった。満足していないのは欧米出身の3人の妻だけだった。サポートのない孤独な子育て、仕事中心の生活、および、夫婦関係がその理由だった。

3) 異文化出身の妻の6割(内過半数が欧米出身の妻)にはなんらかの心配事、不安、悩みがあった。夫にかかわる事柄(健康への心配や夫の死後の生活への不安)が目立った。しかし、4割の妻には大きな心配事、不安、悩みはなかった。また、ほとんどの妻は多少とも悩みを話せる友人を持っていた。

4) 結婚生活や日本での生活のなかでの問題(困難)については、結婚初期(日本滞在初期)の日本語や生活習慣に関する困難のほか、日本社会、夫婦や家庭、および子どもの養育・教育に関する問題があげられた。

5) 日本社会の問題は、男性優位・女性蔑視、アジア蔑視、仕事中心、画一性などであり、異文化出身の妻のストレスの大きな原因になっていた。特に、アジア出身の妻は女性蔑視やアジア蔑視、欧米出身の妻は仕事中心社会を問題としていた。

6) 夫婦や家庭の問題は、「夫が家事を分担しないこと」と「夫が妻や家族とともに楽しく

生活しようと努力しないこと」だった。後者は、特に、欧米出身の妻によってあげられた。夫が時間とともに日本化し家庭生活に参加しなくなることも問題として指摘された。

7) 子どもの養育・教育について、最も多くあげられたのは、「母親が外国人であることや子どもが日系国際児であることに関連して生じる問題」だった。特に、幼児期や学齢期に多くみられ、母親のストレスの原因になっていた。そのほかにも、「日本の学校（幼稚園）や教育内容の問題」「子どもの日本語（国語）の習得および母親の日本語能力等の限界」「子どもの養育・教育についての夫との意見の相違」「子どもの発達や（問題）行動」があげられた。

8) 地域社会を中心とする異文化出身の母親をも視野にいれた子育て支援システム、今後高齢化する異文化出身の妻たちを支援するシステム、発達障害や問題行動のある日系国際児を支援するシステムなどの整備や異文化間カウンセリングや異文化間ソーシャルワークの専門家の養成などの必要性があげられた。なお、これらのサポート以外に、極端な仕事中心社会である日本社会が構造的に変化する必要性も指摘された。

最後に、本研究の問題点や今後の課題について言及する。

まず、今村・高橋（2003）も指摘しているように、日本人男性と結婚した異文化出身の妻を対象とした研究においては、調査協力者の獲得が困難なために一定の組織（幼稚園、教会など）を媒介として調査を実施することが多く、調査対象者には初めから偏りがある。また、調査には、比較的安定した状態にある人が参加しやすいことも知られている。本研究の場合は、組織を媒介としていないが、国籍の多様性や事例数からも、本調査結果を単純に一般化することはできない。今後、事例数を増やすことなどによって、本研究によって得られた知見をさらに明確にしておく必要があるだろう。

また、調査参加者の言語力と調査者の言語力との関係で参加者が必然的に限定されてしまう問題があげられる。すなわち、調査参加者は、日本語がある程度可能か、あるいは、調査者が可能な言語でコミュニケーションができる人に限られてしまう。その他の言語しか話せない人は調査対象から除外されてしまうことになる。したがって、今後、複数の言語の使用を念頭に置いた研究チームによる調査も望まれる。たとえば、各国出身の社会福祉関係者やカウンセラーなどとの連携による調査も有効であろう。

<注>

- 1) 日本国内外における日本人の婚姻総数に占める国際結婚数（どちらか一方が日本人の国際結婚）は1986年には、2.1%に過ぎなかったが、約20年後の2005年には、7.1%（約14組に1組）に上昇した。
- 2) 以上の数字・数値は厚生労働省人口動態統計による。
- 3) 子どものいる人を確保するための追加調査において、欧米出身で離婚した人が1人いたが、離婚後10年以上経過していたため本稿からは除外した。
- 4) 日本人男性と結婚した異文化出身の妻から面接の承諾を得ることは予想していたよりも困難だった。夫の同意が得られないこと、面接者が使用できる言語に限りがあること、長時間にわたる面接などの理由による。
- 5) 筆者は、1990年代初頭より、インドネシア（バリ州）で、インドネシア人男性と外国人女性（特に、日本人女性）の夫婦とその子ども（国際児）からなる国際結婚家族（国際家族）を対象に適応や文化的アイデンティティについての継続的なフィールド調査を実施している。本研究では、その知見を活用した。
- 6) 調査者（筆者）は、英語とドイツ語に関しては十分な会話が可能であり、インドネシア語については日常会話が可能である。
- 7) 欧米出身の妻の場合には、結婚前から同居している人もいた。その場合、同居期間も結婚年数に含めた。

引用文献

- Harcach-Pinke, L. (1988) Interkulturelle Lebenswelten: Deutsch-japanische Ehen in Japan. Frankfurt: Campus Verlag.
- 今村祐子・高橋道子（2003）外国人母親の精神的健康に育児ストレスとソーシャルサポートが与える影響—日本人母親との比較—東京学芸大学起用1部門、55、53-64
- 石河久美子（2003）異文化間ソーシャルワーク 川島書店
- 国際結婚を考える会（2007）国際結婚ハンドブック第5版 明石書店
- 厚生労働省（各年）人口動態統計
- 桑山紀彦（1995）国際結婚とストレス：アジアからの花嫁と変容する日本の家族 赤石書店
- 中澤進之右（1996）農村におけるアジア系外国人妻の生活と居留意識 家族社会学研究、No. 8、81-96
- 鈴木一代（1998）国際児の学校選択と言語習得—日本—インドネシア国際家族、ドイツ語圏—インドネシア国際家族、英語圏—インドネシア国際家族の比較 東和大学紀要、No. 24、209-222
- 鈴木一代（2000）国際結婚女性の再社会化についての研究—バリ島の日本人、ドイツ語圏出身者、英語圏出身者— 東和大学紀要第26号、189-198
- 鈴木一代（2003）国際結婚者の国籍変更と文化的アイデンティティ 埼玉学園大学紀要人間学部篇、第3号、1-12
- 高橋順子（2003）多文化社会における国際児 聖徳大学児童学研究所「児童学研究—聖徳大学児童学研究所紀要」、第5号、39-50
- 竹下修子（2000）国際結婚の社会学 学文社
- 矢吹理恵（1997）日米結婚における夫婦間の調整課題—性役割観を中心に— 発達心理学研究、vol. 12、37-50.

[謝辞]

本調査にご協力いただいたみなさまと調査をサポートしていただきました高橋順子氏（クリスチャン・アカデミー・ジャパン）にこころから感謝いたします。

[資料] 表1：調査参加者の属性

事例	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
国籍	フィリピン	フィリピン	フィリピン	中国	中国(香港)	日本(台湾)	韓国	インドネシア	インド	中国
年齢	40代	50代	30代	30代	40代	40代	50代	40代	40代	40代
職業	専門職	接客業	主婦	会社員	語学講師	会社員	専門職	芸術・芸能家	語学講師	語学講師
仕事形態	パート	パート	/	フルタイム	パート	パート	パート	パート	パート	パート
教育レベル	大学院修了	高卒	高卒	大卒	大学院修了	高卒	大卒	大学中退	大学院修了	大卒
滞在期間	20年	23年	7年	12年	7年	約22年	33年	16年	15年	約5年
結婚期間	11年	17年	3年	9年	9年	約22年	33年	18年	17年	約4年
滞在予定	永住	永住	永住	未定	永住	永住	永住	未定	永住	永住
帰国	年1回	なし	今まで1回	年1回	未	2～3年1回	年1～2回	年1～2回	年1回	年1～2回
宗教	キリスト教	キリスト教	元キリスト教	なし	キリスト教	なし	なし	ヒンドゥ	ヒンドゥ教	なし
日本語力	4	3	2	5	3	4	5	4	5	4
子どもの数	1人	2人	1人	2人	1人	1人	3人	1人	1人	1人
子どもの学校	小学校	成人/高校	乳児	小学校/幼	小学校	高校	成人	高校	高校	大学
子どもの国籍	日本	日本	日本	二重	日本	日本	日本	日本	日本	中国
夫の年齢	50代	40代	50代	50代	(年上)	50代	60代	40代	(かなり年上)	60代
夫の職業	専門職	運輸業	職人	主夫	教員	会社員	教員	自由業	会社員	定年退職
夫の学歴	大卒	高卒	(高卒)	短大卒	大学院修了	高卒	大学院修了(専門学校)	大卒	大卒	大卒
夫の宗教	キリスト教	なし	なし	なし	キリスト教	(仏教)	なし	(神様)	キリスト教	なし
家庭の主要言語	日本語	日本語	日本語	日本語	英語	日本語	日本語	インドネシア語	日本語	日本語

事例	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳
国籍	米国	オーストラリア	ドイツ	ブルガリア	ポーランド	フィンランド	イタリア	イタリア	ドイツ	ドイツ
年齢	30代	30代	40代	50代	40代	50代	40代	40代	30代	40代
職業	専門職	主婦(講師)	専門職	語学講師	専門職	自由業	語学講師	語学講師	専門職	教員
仕事形態	フルタイム	パート	パート	パート	パート	パート	パート	パート	フルタイム	フルタイム
教育レベル	大学院修了	大卒	大卒	大卒	大卒	高卒	大卒	大学院修了	大学院修了	大卒
滞在期間	12年	約6年	18年	26年	14年	23年	11年	約12年	10年	13年
結婚期間	9年	4年	18年	27年	15年	21年	15年	9年	7年	11年
滞在予定	未定	帰国予定	永住	永住	未定	永住	(永住)	(永住)	永住	永住
帰国	年1～2回	年1～2回	年1回	/	年1回	最近なし	年1回	年1回	年1回	年1回
宗教	キリスト教	キリスト教	キリスト教	キリスト教	キリスト教	キリスト教	/	仏教	なし	なし
日本語力	4	2	5	4	5	3	5	5	5	5
子どもの数	2人	1人	1人	1人	1人	2人	2人	3人	0	0
子どもの学校	小学校/幼	幼稚園	小学校	大学	小学校	成人/高校	中学校/小学校	小学校/幼/保	/	/
子どもの国籍	二重	二重	二重	日本	日本	日本	日本	二重	/	/
夫の年齢	40代	30代	50代	50代	40代	50代	50代	40代	40代	50代
夫の職業	教員	会社員	公務員	会社員	専門職	専門職	教員	自由業	自由業	公務員
夫の学歴	大学院修了	大卒	大卒	大卒	大卒	大卒	大学院修了	(大卒)	大学院修了	大卒
夫の宗教	キリスト教	なし	なし	なし	神統	仏教	なし	なし	なし	なし
家庭の主要言語	英語	英語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語

- 注1)「日本語力」は5段階評定:「5」が最高で「1」が最低、「3」が日常会話レベル
 2)「子どもの学校」欄の幼=幼稚園、保=保育所
 3) ()は推定